

(4) 奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究部門②遊びと学び

やってみたいが溢れる保育～子どもの声から広がる遊び～

申 珠鈴、中 綾（埼玉県・（公財）鉄道弘済会与野本町駅前保育所）

〈自由研究部門〉

2歳児クラスにおけるごっこ遊びの実践

佐藤 匠（東京都・みつばち保育園）

色水遊びを通して

尾関 邦子、大内 明美（滋賀県・幼保連携型認定さくらがおかこども園）

課題研究② 遊びと学び やってみたいが溢れる保育 ～子どもの声から広がる遊び～

埼玉県・与野本町駅前保育所 申 珠鈴・中 綾

<はじめに>

子どもも大人も「やってもいいの?」と控え目だった当園は、2016年度の法人内での公開保育をきっかけに、繰り返し環境改善を行いながら何度も保育を振り返り、話し合い、子ども達とも語り合ってきたことで、保育士等も子ども達の「やってみたい」に少しずつ柔軟に対応出来るようになってきた。

「主体性」という言葉に囚われすぎて本質が見えなくなったり、「自由」ってなんだろうと堂々巡りの話し合いで出口が見えなくなったりと、子ども達は今、何をしたいのか、何が流行っているのか、「今」にすぐ反応する目や力についてはもう一歩踏み込んで考えていかなければならないと感じていた。

<研究の目的>

子ども達の遊ぶ姿や保育士等の思いを保育に活かそうと振り返り、試しながらまずは“やってみる”という姿勢になってきたのは大きな変化であり、子ども達の声から始まる遊びや活動も多くなった。そして、子ども達の発想は更に自由で豊かになったと感じる。保育士等に園全体の子どもの姿や遊びに目を向ける余裕が出てきたことも、良い変化なのではないだろうか。しかしその一方で、多人数（幼児クラス全員）での散歩は大変で億劫、園庭遊びは幼児クラスが優先、というイメージが何となく園全体にあったり、好きな場所で遊ぶことも大切だが室内遊びが盛り上がり、遊び場が偏って体を動かす機会が極端に減ってしまってもいいのだろうか、という迷いが出たりと、見直し切れていないと感じる場面も多かった。

(写真1)



保育士等一人ひとりの保育観、各クラスの保育目標(ねらい)、子ども達の姿等、様々なことを考え、取り入れ、形にしていくことは簡単ではない。毎日繰り返しのようで、繰り返しではない園生活をいかに楽しく魅力的なものにするか、保育士等も一緒に楽しめる環境を作っていくにはどうしたらいいか、話し合い、様子を見て、時にはぶつかり合いながら、今も試行錯誤を続けている。保育士等の思い、子ども達の遊びの変化等を追いながら、今後の展望についてもまとめていきたい。

<研究の方法>

1. 日々の保育の振り返り
2. 話し合い
3. リーダー会議・職員会議での周知

<事例と考察>

1. 2017年～2019年度 ～遊び場の変化～

<事例1>

公開保育を終え、環境の見直しを行ったところ、子ども達の遊び方も変わってきた。

①～幼児クラス ロッカーの配置換え～

各クラスのロッカーは通年、保育室の中央が広く使えるよう壁沿いに設置されていた。2017年度、幼児クラスは、ロッカーを向かい合わせに配置することで生活習慣(着替え、身の回りの整理等)に集中出来る環境を作り、室内の仕切りや掲示板等としても活用してみることにした(写真1)。

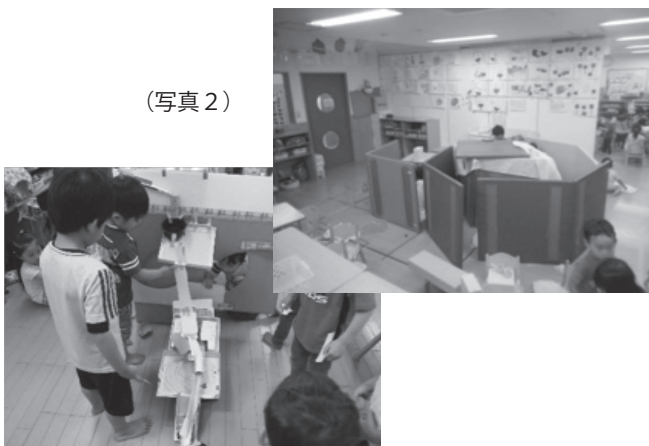
ロッカーを仕切りにすることで生活空間と遊び場が自然と分かれ、遊びへの集中力も増した。

また、ロッカーの側面や背面を遊び場の一部として使う姿も見られるようになった。今までは個人の持ち物の保管場所、遊びに使ってはいけない所、というイメージがあったようだが、背面となればただの壁、仕切りとして捉えられるようになり、ポロボロになった図鑑のページを切り貼りして飾ったり、実験装置やお家ごっこの土台にしたり（写真2）と、子ども達なりの工夫で活用していた。それは保育士としても新たな発見であり、子ども達の柔軟な考えや遊び方に感心させられた。

今までだったら「壊さないで!」「邪魔しないで!」

という声が飛び交っていきそうな状況（写真3）だが、手前ではカプラが高く積み上がっており、奥ではおままごとが盛り上がっている。環境を変えただけで遊び方も、遊びへの集中力も変わるのだ、と改めて感じた姿だった。また、カプラで遊んでいる子ども達からは作った物を『壊したくない。』という声も多く聞かれたので、壊さずにそのまま残すことにした。子ども達自身も壊さないように気を付けながらテーブルを並べ食事をしたり、食後は遊びの続きを楽しんだり、お昼寝も同じ空間でしたりとその時々環境に合わせて順応しながら過ごしている子ども達の姿に驚かされる出来事だった。

(写真2)



(写真3)

次第に、同じ空間で住み分けられるようになった ⇒



②～戸外でも室内遊びを～

午睡時に使っていたゴザが古くなってきたので遊びや畑等に使用出来ないかと、まとめて園庭に出していたことがあった。ちょうどおままごとやごっこ遊びが充実してきた色々な玩具や用具を遊びに取り入れ、遊びを広げられるようになってきた頃だったこともあり、園庭遊び時に「使う?」と提供してみた。すると、たちまち子ども達が集まり、「あれに使おう!」「ここで広げよう!」とすぐに遊びに取り入れ始めた。おままごとをしていた

数人は、踏み台をテーブルにし、砂場セットの玩具や用具を集め、部屋の模様替えをするようにみんなで配置を考えて、あっという間に素敵な空間が出来上がり、予想以上に遊びが広がった（写真4）。プール遊びに使っていたパラソルもあったので設置するか聞いてみると、「使ってみたい!」と更にイメージが膨らんだようだった。おままごとの横では簡易砂場に水を溜め、花びらを浮かべて優雅に水遊びを楽しんだり、パラソルの下で昼寝をしたりと思い思いに遊び始めた。

(写真4)



土曜保育の天気の良い日には、ゴザをテラスに敷き、日向ぼっこをしながらじっくりとオセロを楽しむ5歳児2人の姿も見られた(写真5)。異年齢保育の中で年下の友達のお世話をしたり一緒に遊んだりすることももちろん好きだけど、“今は2人でじっくり遊びたいの。”と、2人の空間が出来上がっているように見え、微笑ましい場面だった。

(写真5)



ゴザを遊びに取り入れることが定着してきた頃、園庭前のホールで電車で遊んでいた男児数名は、「外に繋げちゃおうよ」とテラスまで線路を繋げてみることにしたようだった(写真6)。室内遊びの玩具や用具を持ち出すこと以外に、室内外の境は関係なく遊ぶとは、園庭で遊んでいた子ども達も驚いたようだった。それぞれの遊びが混ざるかな、電車が泥だらけになるかな、砂まみれのまま片付けるのかな、と保育士は様子を見ていたが、その時はテラスに線路を広げ、いつもとは違う雰囲気を楽しんでいたようで、それぞれがいい意味で干渉しすぎず、上手く共存出来ていたことに驚かされた。

(写真6)



思い付きで提案したが、室内で使っていたゴザは、いつの間にか園庭遊びの必須アイテムになっていた。使い方は子ども達次第、日によって様々な楽しみ方で遊びに取り入れていた。身の回りのもの、生活用品、用具等、玩具でなくても、遊びに取り入れその時の子ども達なりの楽しみ方が出来るのだと再発見し、保育士等の“やってみようか”という気持ちも更に盛り上がった出来事だった。

<考察>

保育だけでなく保育環境も“こうでなくてはならない”という考えがあったことに気づき、保育室は生活の場であり遊び場でもあると再認識出来た。また、「室内遊び」「戸外遊び」と無意識に分けて考えていたことで、遊びも遊び場も決まってしまうことに気付かされた。遊び場の境界線がなくなってきたことで遊びの幅も広がり、「○○じゃなきゃ出来ない」という考え方も少なくなってきたように感じる。

2. 2020年度ー ～共有スペースの活用～

<事例2>

①お砂場会議 ～みんなで仲良く遊べるように～

2020年度ー 幼児クラス

十数人の幼児クラスの子ども達が2歳児クラスと園庭遊びをしている時、『子ども達に砂場遊びをさせたいが、幼児クラスの子が砂場遊びで山や川を作っていて、作り途中の物があると壊してしまうのではないかと思い、思い切り遊ばせてあげられない。継続しているのは分かるが…』という2歳児クラス担任の思いを聞いた。その日の活動後、遊びの振り返りの時間に子ども達と、テーマ「どうしたら保育園のみんなが仲良く砂場遊びをすることが出来るか」お砂場会議を開くことになった(写真7)。

例：お砂場会議の様子

(写真7)



子ども達：「砂場を半分ずつにするのは？そしたらみんなで使えるんじゃない？」「半分にすると、遊ぶ所が小さくなるから、お山一つしか作れなくなっちゃうよ。」「端に作ればいいんじゃない？」「川も作りたいけど…」「山の回りに作るのは？」「川を作って水を使うと、小さい子供達が使う砂場に流れてしまうんじゃない？」

保育士：「半分ずつにして、水が流れこまないようにするにはどうしたらいいかな？」と問い掛けると「木の棒を置くのは？」「石を積み上げたら？」「砂の下に板を入れる？」等、様々な意見が出た。

子ども達の意見が出た後に2歳児クラスの担任にも参加してもらい「小さいお友達のクラスが園庭を使わない時は、全面使って大丈夫だよ。でも、使った後は平らに戻してほしいな。」と提案があった。砂場会議後、幼児クラス担任で周知し、リーダー会議で全クラスに砂場会議の内容や子ども達の様子、今後5歳児が実験していく為、経過を見守って欲しいことを伝えた。また、その日の夕方、砂場会議で使用したホワイトボードを玄関先に置き、今子ども達がどんなことに悩み、どんなことに取り組んでいるのか保護者に知ってもらい、一緒に考えてもらう機会を設けた。保護者からは、「お家で一緒に考えてみようか。」「みんなで仲良く使えるように考えるなんて、いいですね。」「そんなことも話し合っているのですね。難しい保育園になりましたね。」等、様々な感想が聞かれた。

職員同士の何気ない会話から子ども達とお砂場会議を開くことになったが、みんなで話し合いを重ね、意見を確認したり、約束事を決めたりする中で子ども達自身が気を付けるようになり、0～2歳児の友達が危なくないように、またケガをしないように、砂場を使用した際は平らにしたり、石や枝などが落ちていないか確認したりする姿も見られるようになった。自分以外の友達の事を考え、いろいろな意見を交わす中でどうしたらみんなで仲良く遊べるか、自分の思いを伝え、友達の思いを聞き、実践してみる、会話を通して思い合う姿があった。

<考察>

今回、砂場会議を開いたことで自分以外の友達（2歳児クラス）が砂場遊びをしたくても出来なくて困っている事を子ども達自身が知り、「どうしたらみんなが仲良く砂場遊びが出来るか」を考え、悩み、保育士や友達といろいろな意見を交す中で積極的に自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりする姿に成長を感じた。

幼児クラスの担任も他クラスの思いを知り、当たり前に行っていた普通の保育を再度見直したり、考えたりする良いきっかけになったのではないかと感じている。思っていることを言葉にして伝え、意見を交わし合うことの大切さを改めて感じる出来事だった。

②園庭遊び～乳児クラスと幼児クラスで園庭使用を分けてみたら～ 2020年度秋頃

砂場を分けてみた後0～2歳児クラスより、午前中の活動時間内で、乳児（前半）、幼児（後半）で時間を分けて園庭を使用したいという提案があった。0～2歳児クラスの子も達も戸外遊びに慣れてきて、身近な物に興味を持ったり、年上の友達の姿を真似したりする姿も出てきた。幼児クラスの活動に合わせ散歩に出掛けたり、作っている物（泥団子、砂山等）を壊さないように気を付けたりしながら遊んでいたが、その日の子ども達の様子や気候に合わせてもっと戸外遊びを充実させたいという思いが出てきたからだった。

一方、幼児クラスでは室内遊びが充実し、様々な素材を使い、お店屋さんごっこ（回転寿司、配達）等の遊びを展開していた。それに伴い、外遊びをしない子が増えた。季節的なことで“寒いから…暑いから…”や“外に行く到着替えなきゃいけないから面倒…”等、理由は様々だったが、園庭遊びをもっと充実させ、子ども達に戸外遊びの楽しさを知って欲しいという幼児クラスの担任の思いもあり日々悩んでいた。0～2歳児クラスから出た案を幼児クラスの担任で話し合い、その後子ども達に伝え、時間で分けて使ってみることにした。戸外遊びが好きな子ども達からは、『早く外に行きたい』『鬼ごっこをしたい』等の意見が出るが増えた。子ども達の声を聞き、再度幼児クラス担任で今までの保育を振り返り、話し合った。

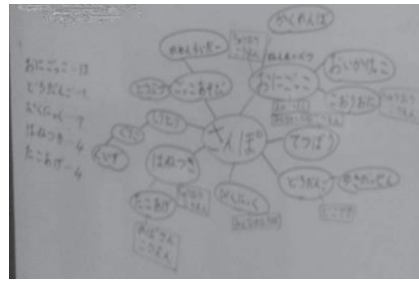
「遊びが室内に偏っていたのではないか？」「戸外遊びをする子が少ないとは感じていた。戸外遊びが楽しいということを子ども達にもっと伝えていくのはどうか？」「散歩に出掛ける機会を多く取り入れてみるのはどうか？」「子ども達が好きな遊びを選んでいながら、敢えて誘わなくてもいいのではないか。」等、様々な意見が出た。

とことん話し合いをし、時間になるまで園庭で遊べないなら散歩に行く機会を増やしていこうという結論になった。

今まで、“散歩に行くならクラス全員で行く”という意識が職員間でも強くあったり、そもそも散歩に出掛けようと思わなかったり、散歩先での遊びの幅が狭く、「散歩先で楽しめる遊びってあるの？」と感じる職員や「なんとなく面白くなさそう・・・」と思う子ども達がいたり面白さに気付いていなかった。子どもも大人も「楽しい！」「散歩に行きたい！」と思わず“わくわく”するような雰囲気作りをするにはどうしたらよいか、また、『子ども達はその日の活動を自分で選び自分で決めることを大切にしたい』という思いから、室内遊び、散歩、園庭と好きな場所を選び、その日の気分で楽しめるように子ども達と散歩会議を開いて話し合うことにした（写真8）。

例：散歩会議 「散歩でやりたい遊び」

(写真8)



保育士が、「園庭に早く出たい！というお友達もいるから、散歩に行って色々な公園で遊ぶのはどうかな？」と思っているんだけど、みんなは何をして遊びたい？」と聞くと、子ども達からは「羽根つきしたい。」「たこあげもしたいね。」「鬼ごっこもいいなあ。」「ピクニックが楽しいかも。」「泥団子作りもしたいね。」と様々な思いが聞かれた。

次に保育士が、「じゃあ、どこだったらみんなが言っていた遊びが出来そうかな？」と聞くと、子ども達からは「羽根つき、凧あげは中央公園が広いから出来ると思う。かばさん公園もいいよね。」「鬼ごっこやピクニックはみんなの広場がいいよね。」「泥団子遊びはどこでも出来るんじゃない？」と沢山の意見が出た。

子ども達から出た案を出来るだけ実現出来るよう担任で話し合い、活動人数に合わせて職員の配置人数を調整したり、登園してきた子ども達を誘って散歩の下準備をしたりと工夫を重ねることで、今まで室内遊びが中心だった子どもも「今日はどこに行くの？」と興味を持ち、次第に戸外遊びの人数が増えていった。何度も子ども達と話し合いを重ねていく中で園庭、室内、散歩と遊びの選択肢が広がり、登園する時の子ども達の楽しみの一つになっているのではないかと感じている。

子ども達の意見を聞いたその後の散歩の様子をご紹介します(写真9)。

(写真9)



ピクニック



お家作り



ステンドグラス



シャボン玉



スタンプラリー



UFO作り



落ち葉拾い

<考察>

今まで幼児クラスが散歩に行かなかった（行けなかった）のは何故だろうか。改めて考えてみると、遊びが分散されることで配置人数が足りなかった、行事前・季節の製作等で時間に余裕がなかった、散歩先が決まっていた面白くなかった、と様々な面からの課題に気付くことが出来た。以前から散歩先を子ども達と一緒に決め出掛けることもあったが、今回散歩会議を開いたことで散歩先での「何」を面白く感じているのかをより深く知るきっかけになったと感じている。子ども達に様々な遊びがあること、室内遊び、園庭遊び以外の活動に目を向けさせてあげられていなかったのではないかと考えさせられることもあった。

0～2歳児クラスと幼児クラスと一緒に遊べる環境作りを目指し、今回は園庭の使い方について話し合ったが、共有スペースの活用について改めて難しさを感じた。しかし、今回の2つの会議をきっかけに、幼児クラスの戸外遊びの幅も広がった。また、幼児クラスだから見えている物や景色、乳児クラスだから見えている物や景色の違いに改めて気づくことができたと思う。だからこそ、それぞれのクラスの様子や保育のねらい等を普段から伝えていき、話し合い、意見を交わし、互いに理解し合い、譲り合えるようになることが第一歩なのではないか、と感じている。今後も子ども達の声に耳を傾け、より一層遊びが楽しくなるような雰囲気や遊び込める環境を子ども達と一緒に考え園全体で作っていききたい。

<まとめ>

園全体で保育を振り返り、記録を改めて見直してみると、今の園の形（子ども達の姿、保育士の意識、保育環境）になったのは、「当たり前」でやってきた一斉活動中心の保育の経験と、公開保育後の葛藤があったからだ実感する。

子ども達のやってみたい気持ちを受け止めていく中で、保育士等も“やってみたい”と言っているのだ、と気付

くことが出来た。「今まで通りでいいよね」の壁を越えていききっかけが出来たことで、子ども達の姿から“これ面白そうだな”と保育士自身が楽しさや面白さに気付けるようになったり、他園の取り組みに目を向けて自園なりに取り入れてみたりと、「今まで通りで安心している保育」、「やってみる前から諦める保育」から抜け出しつつあるのではないかと感じている。それでも、「やってみてダメなら戻ればいい」と考えられるようになるまで時間が掛かり、今でも「本当に大丈夫？」と足踏みすることも多いが、公開保育前の様子と比べると、いい意味で「まあ、いっか」と捉えられるようになった。遊びや環境構成の話し合いをすると、「ここまで変わるとは思わなかった。」「こんな姿、想像出来なかったね。」という話になるが、“今までの保育が間違っていた”という話にはならない。それはきっと、今までの「当たり前」でやってきた保育の良さは残しながら、新たに取り入れたい事にも目を向けられるようになってきたからではないか。子ども達の主体性を引き出したいと試行錯誤するうちに、保育士等にも主体性が身につけてきたのか…？と、少しずつ自信にも繋がっている。

「はじめに」と「研究の目的」にも書いた通り、課題とを感じる場面はまだ多く、子ども主体を重要視しすぎて片付けや生活習慣が後回しになったり、クラス担任の思いが前に出過ぎたり、他クラスに遠慮し思っている意見や思いを伝えられなかったり、子どもと同じように職員も得意、不得意がありそれに寄り添えなかったりすることもあり、今でも行ったり来たりを繰り返している。話し合いやリーダー会議、職員会議などを通し意見を交わす中で、子ども達だけではなく職員同士の対話の大切さを改めて感じた。

「子ども達が主役」という気持ちを忘れずに、これからも思いを発信しながら園全体に“やってみたい”が溢れるように、子ども達も大人達も一緒に楽しんでいきたい。

キーワード：環境構成・対話・横の繋がり

評者：小林 芳文

研究を進めて行くために、モチベーションとしての背景、「はじめに」に挙げていること「自主性、やってみたい」は、大事な要素になっています。それだけに日常の保育での子どもたちの姿や、環境の見直しに着目したこと、そして研究の取り組みが始まったこと等、興味を持って拝読しました。

本研究のテーマ「やってみたい」の意欲の保育は、保育関係者はもとより、発達研究を試みている方は一同に思っていることです。これらについてももう少し掘り込みがあればさらに良い研究になったと思います。本研究の方法に、具体性や細かな踏み込みを明確にしていればと思いました。本研究の良い点は、長年にわたり取り組んだこと、その気づき等が解りやすい写真で整理できたことです。また、戸外でも身近なゴザを活用して環境作りを試みたこと、遊び場を工夫したことで子どもの活動が変わったことです。子どもたちに聞いたことからの発想により生まれた様々な活動に目を向けた研究も素晴らしいところです。今後の継続研究を期待したいです。

評者：天野 珠路

公開保育をきっかけに自分たちの保育を見直し、特に子どもの遊びにおける「主体性」を重要視して試行錯誤を重ねた実践記録です。子どもたちの意見を聞いたり、保育者たちが話し合ったりしながら室内や園庭の環境を変えていった様子がうかがえます。子どもたちの「やってみたい」気持ちを受けとめ、次々と試したり工夫したりする中で、子どもたちが積極的に遊ぶようになったのはとてもよかったと思います。

3年間にわたる実践記録の中で、より子どもの

成長を継続的に追ったり、丁寧に確認したりすることができたら実践記録に厚みが増したことでしょう。また、保育者が子どもの遊びを見通して環境を構成することはもちろん、保育の意外性や思いがけない発展をおもしろがりながら、子どもと一緒に環境を再構成していく保育の醍醐味を味わっていただきたいと思います。

評者：日吉 輝幸

「子どもの主体性」「主体的な活動」等々の言葉が、保育界で一般的になり久しい。主体性を大切にすると一言で言っても、無秩序に子どもが望むことだけを「自由」にさせるものではありませんが、その解釈や保育の取り組みについては、千差万別ではないかと思われまます。与野本町駅前保育所では日常の保育を振り返り、これまでの“こうでなければならない”との前例主義や画一的な考え方から脱却しようと試みており、施設や保育者の都合で遊び方を決めていたことを、省みていることに好感がもてました。また、「お砂場会議」「散歩会議」と称して、子どもたち自身に他年齢児との砂場の共有について考えさせたり、散歩に行った先で何をしたいか考えさせたりしていることも良かったと思いました。

何よりも、今回の研究をとおして、保育者自身がポジティブな思考に変わっていった様子が伺えたことは、大変良いことだと思いました。大人の都合を優先させず、子どもの興味・関心を優先させて関わるのが「子どもの主体性」を育むことにつながっていくということを前提に、今後とも研鑽を積まれることを期待しています。

2歳児クラスにおけるごっこ遊びの実践

東京都・みつばち保育園 佐藤 匠

〈動機〉

一昨年から、2年連続での2歳児クラスの担任になる。一昨年は桃太郎ごっこなど物語に沿ったごっこ遊びを楽しんできた。今年度はそれをさらに発展させ、ストーリーに沿ったごっこ遊びだけを楽しむのではなく、その物語に出てくるキャラクターとの交流や想像の世界を楽しむという新たなごっこ遊びの実践を通し、最後はこの年の2歳児クラス独自の文化（ローカルな文化）が作れないかと考え遊びを広げていった。

〈2歳児クラスの子どもの発達的特徴〉

・概ね2歳

遊具などを実物に見立てたり、「～のつもり」になって「～のふりを」を楽しみ、ままごとなど簡単なごっこ遊びをするようになる。

こうした遊びを繰り返し楽しみ、イメージを膨らませることにより象徴機能が発達し、盛んに言葉を使うようになってくる。

・概ね3歳

大人の行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れたり、象徴機能や洞察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。

また簡単なストーリーが分かるようになり、絵本に登場する人物や動物と自分を同化して考えたり、想像をふくらませていく。それらを劇あそびやごっこ遊びに発展させていくこともある。

〈クラス文化を作っていくための段階〉

クラスの文化は作ると思っていてもいきなりできるものではない。4つの段階をへて確立していった。

1. 模倣と同調に基づく情動交流
2. 物語世界を基板としたイメージの共有
3. 探索活動を通じた現実の物語化
4. 物語と現実の交差によるクラス文化の創造

(子どもとつくる2歳児保育 ひとなる書房)

しかしこれだけだと抽象的なので実践を紹介しながら一つ一つ説明していく。

第1段階 模倣と同調に基づく情動交流

こう書くと難しいが、簡単に言うともねっこや簡単なごっこ遊びを通して、子どもや大人同士で楽しさを共有していく過程のことであると考えている。

4月21日 節分ごっこ

・最初に保育士が鬼になり、「ドシン！ドシン！」と言って近づき子ども達に豆を投げてもらおう。これを何度か繰り返すうちに今度はKO君、AKちゃん、RAちゃんが鬼になる。AKちゃんは保育士と同じように「ドシン！ドシン！」と言いながら近づいてきて豆を投げられると「いてて」と言って逃げていった。RAちゃんは豆を投げられると「かわいいオニだよ」と言って自分は怖くない鬼だと訴える。KO君は豆を投げられると「いたくないぞ（きかないぞ?）」と言って逃げていかない。その後苦い豆や、辛い豆など色々な豆を投げ、熱い豆を投げたところで「いてて」と言って逃げていった。AS君、KE君は最後まで鬼にはならず、保育士と一緒に豆を投げ続けていた。

7月 動物園ごっこ

・保育士が「動物園に行こう」と声をかけ、ラプンツェル（ディズニー映画に登場するヒロイン）になったMOちゃん、SAちゃん、RIちゃんと動物園に出かける。SAちゃんが押し入れのあたりを指さし「あ、キリンさんいたよ」と話すとKO君とTA君がリズム体操のキリンになり「キリン、キリン」と鳴きながらキリンになる。次にSAちゃんが本棚のあたりを指さし「ライオンさんだ！」という慌ててKO君、TA君も本棚の前に移動しKO君は四つん這いで「アー」と低い声でうなり、TA君は立ったまま「ライオンだー」と声を上げる。SAちゃん、RIちゃんは「キャー」と笑いながら悲鳴を上げ、MOちゃんは「あ～、こわいわ～」とかよわい声で呟いていた。次にKO君の方から「ワニっていいよ」とリクエストし、SAちゃんが「ワニがいたよ！」と言うとKO君はワニのリズムをしてワニになり、TA君はライオンを続けていた。

以上の2つが具体的な実践になると思う。1つ目の実践では最初、保育士が変身した鬼に対して、子ども達皆で豆を投げ、「少し怖い」や「鬼を倒した」という喜びを子ども達で共有した。その後今度は子ども達自身が保育士の真似をして鬼になり、鬼になる楽しさ、そして豆を投げる方の子ども達は、鬼になった子ども達とのやり取りを楽しんでいた。

2つ目の実践では女の子はラプンツェル、男の子は動物園の動物になり、それぞれ切り切っている物は違うが、

お互いにイメージや楽しさを共有しながら遊びを楽しんでいた。

このように「楽しい」や「少し怖い」などの情動の交流を大人や子ども同士で重ねていくことが次の段階に繋がっていく。

第2段階 物語世界を基盤としたイメージの共有

次は「浦島太郎」「シンデレラ」など何か特定のお話のイメージを大人と子ども達で共有して楽しんでいった。特にシンデレラは園の行事の出し物で職員が劇をやったことで子ども達の中に深く印象に残ったようで、何度も繰り返しごっこ遊びを重ねていった。

6月9日 シンデレラごっこ

・午後クラス全員でシンデレラごっこをして遊ぶ。MOちゃん、SAちゃん、RAちゃん、AKちゃんは自分からシンデレラになり、保育士がBGMに合わせて意地悪な姉になり、「シンデレラそこが汚れてるわよ!」「私はダンスパーティーに行くけどあなたは留守番よ」とセリフを言うと「ハイ」と床を拭く真似をしたり、「シクシク」と泣きまねをする。

次の魔法使いが出てくる場面になるとそれまで見ていただけだったKO君と、シンデレラをしていたMOちゃんが保育士と一緒に魔法使いになり「ビビディ・バビディ・ブー」と魔法をかける。

お城につきダンスパーティーが始まると、KE君も入ってきて保育士と一緒に手をつなぎダンスを踊っていた。12時の鐘が鳴ると全員慌てて本棚の方へ走っていき、一か所に集まる。保育士がガラスの靴に見立てたレゴブロックを持って「このガラスのお姫様を探しに行こう」と言うと「MOちゃんがやる」と言ってMOちゃんがレゴブロックを持っていき一人ひとりの足にレゴブロックをはめていた。結婚式の場面になるとそれまでシンデレラではなかったKO君、靴を履かせる役だったMOちゃんも一緒になって保育士や他児と手をつなぎ、結婚式に参加していた。KA君、AS君は最後までのでパート職員と一緒に劇の様子を見て参加していた。

8月28日 浦島太郎ごっこ

・浦島太郎の竜宮城をテーマにした制作を行い、その制作を使ってごっこ遊びを行う。KO君は最初あまりやりたがっていなかったが、始めると、浦島太郎、カメ、最後のお婆さんなど全部の役で参加していた。

最初は見て参加しているだけだったYU君も、カメの登場シーンになるとリズム体操のカメのポーズを取りカメとして参加する。最後浦島太郎が玉手箱を受け取る場面では一緒に玉手箱を受け取り、「YUがあける」と言って開けると、保育士の真似をして腰を曲げてお爺さんになっていた。

9月18日シンデレラごっこ KA君・AS君

・クラス全員でシンデレラごっこをして遊ぶ。シンデレラごっこをすることを伝えるとKA君も「KAちゃんのスカートは?」と言ってスカートをはきたがる。他児にスカートを全部はかれていたので、保育士がバンダナでスカートを作るとそれをはいて参加していた。AS君もスカートををはいて待っていた。

BGMが流れるとKA君は踊りを踊って参加し、AS君はキッチンの所で様子を見ていた。シンデレラが床を拭くシーンになるとAS君はいつも雑巾に見立てて使っているバンダナを急いで探し、確保していた(しかし劇には入ってこない)。KA君はしばらく周りの子の様子を見てからバンダナを探しに行き、もう次の場面に移ってから床を拭きだす。

魔法使いの場面になるとそこからAS君は劇に参加してきた。保育士が「いってらっしゃーい」と手を振ると他児と一緒に本棚の隅に移動していた。

ダンスパーティーの場面になると、KA君もAS君も一人でダンスを踊っていた。他児や保育士と一緒に手をつなぎたいと訴えることは無かった。

12時の鐘が鳴るとKA君は皆と同じ場所に集まり、AS君は少し離れた所で集まった子を見ていたが、保育士が「このガラスの靴をはけるお姫様いますか?」と話すで一瞬真似をする。保育士がお姫様を探す演技をすると、すぐに靴をはこうと他児の中に入っていった。KA君、AS君は二人とも靴をはき、結婚式のシーンでは音楽に合わせてまた踊りだし、AS君は保育士と一緒に手をつなぎに来た。

最後のキャストの発表の所では保育士の前で名前を呼ばれるのを待っていた。

このように1つのお話のイメージを皆で共有し、ごっこ遊びとして楽しんでいくことで、より遊びのイメージが広がっていった。特にシンデレラごっこでは、最初は遊びに入れなかったKA君、AS君がごっこ遊びを繰り返していくうちに徐々にお話のイメージを持って遊びに入れるようになっていった。

第3段階 探索活動を通じた現実の物語化

これまでは「シンデレラ」など、あらかじめイメージ(物語)が用意されていたもので楽しんでいったが、ここからは探索活動などを通して自分たちの身の回りにあるもの(現実)を、イメージ(物語)に取り入れていき、オリジナルなイメージを楽しむ段階になる。そしてここから「じゃらんぼん[※]」というキャラクターとの交流が始まる。

※「じいさまときつね」といお話に出てくるフレーズの一つ。本来はキャラクターではないが、年度の初めから繰り返し読み聞かせているうちにこのフレーズが徐々に子ども達の中で

キャラクター化していった。この子ども達の中で出来上がってきていた「じゃらんぼん」というキャラクターとの交流を楽しむことで、さらにイメージが広がるのではと考え日々の保育の目的、計画の中に組み込んでいった。(写真1、2)

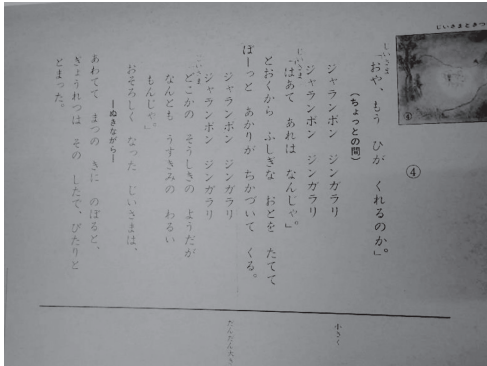


写真1

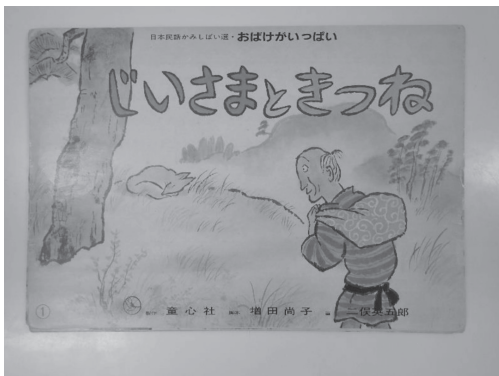


写真2

10月19日

- ・目的 「じゃらんぼん」との出会いのきっかけを作る
- ・計画 下の道への散歩※

下の道の奥まで散歩に行く。歩いている途中、地下の休憩室の窓をじゃらんぼんの家に見立て、保育士が「ここじゃらんぼんの家じゃない？ちょっと誰かノックしてきてよ」と子ども達に声をかける。「じゃあKOいくよ」と言ってKO君がノックしに行こうとすると、MIちゃん、AS君が「だめだよ〜！」とKO君の腕を引っ張って止める。その後誰もノックしに行こうとしないので保育士が、「じゃあ先生がノックしてくるね」と言って窓に近づくと、「ダメだってば〜！」と言ってやはり、AS君とMIちゃんが止めていた。保育士がAS君とMIちゃんに止められている間、YU君、YO君、KA君などはそっと窓をのぞき込もうとし、SAちゃん、MOちゃんは電灯の陰に隠れながら、様子を見ていた。

※散歩コースの一つ。保育園の裏にある小道で道沿いに職員の休憩室の窓があり、その窓はすりガラスになっている。窓の向こうに誰かがいるとぼやけて見える。

10月22日

- ・目的 じゃらんぼんとの交流を楽しむ
- ・計画 下の道への散歩

散歩に出発する前、保育士が「今日もじゃらんぼんのお家行ってみる？」と聞くと、SAちゃんとMOちゃんが「イヤーン、こわい」と言っていたが、KO君とTA君は「ぜんぜんこわくないよ」とやる気を見せていた。下の道のじゃらんぼんの家の前に付くと、たまたま中にいた職員が手や白い布を窓越しに見せると、RAちゃんが「ワ〜、じゃらんぼんだよ！」と叫ぶ。KO君とTA君は真顔で窓を見つめ、近づこうとはしなかった。KA君はギュッと保育士の手を握り後ろに隠れていた。その後じゃらんぼんに手を振り、先に進むとYU君、AS君が「あれがじゃらんぼんかな？」と二人で話していた。

10月27日

- ・目的 身近なものとイメージの世界を繋げて楽しむ
- ・計画 プレゼントをきっかけにした散歩

朝保育士が「じゃらんぼんからプレゼントが届いたよ」と話しながら、カラスウリとドングリを見せる。KO君、MOちゃんは「エー」と言って驚いていた。「今度皆でお散歩に行った時、じゃらんぼんにお礼言おうか？」と話すとAKちゃん、YU君、RAちゃんなどは「ウン」とうなずき、MIちゃん、KA君は小さな声で「こわい」と呟き、AS君は不安そうに黙っていた。

10月28日

昨日のプレゼントのお礼を言い下道の道まで散歩に行く。朝「今日はじゃらんぼんにお礼を言いに行こうか。なんてお礼言う？」と子ども達に聞くとKO君が「ごちそうさまっしておうよ」と提案するが、それは違うと自分でも思ったのか「あ、やっぱりちがう」とすぐに言い直していた。散歩に出発するとYU君が歩きながら「じゃらんぼんにありがとうするの？」と何度も聞いていた。じゃらんぼんの家の前に付き、看護師が中から服を広げてじゃらんぼんをやってくれとMIちゃん、MOちゃん、KA君は慌てて離れるが、SAちゃんは自分から近づいて観察していた。保育士が「プレゼントありがとうございました」とお礼を言うと、RAちゃん、YU君、AS君、TA君は一緒に「ありがとう」とお礼を言い、KA君は離れた所からペコッと頭だけ下げている。帰りに「あれ、あつこせんせい（看護師の名前）じゃない」とRAちゃんが話していたが、園に戻り看護師がじゃらんぼんとは違う色のシャツを着ていたのを見て、「あ、ちがうよ！」ととても驚いていた。

11月5日

- ・目的 身近なものとのイメージの世界を繋げて楽しむ
- ・計画 プレゼント探し

保育士が「今度は皆でじゃらんぼんにお土産をあげようか」と提案し、お土産を入れる箱を持って下の道まで散歩に行く。下の道に付くと皆次々と木の実や枝を見つめる。RAちゃん、SAちゃん、AKちゃんは見つけると「あったよ」「じゃらんぼんこれすきかな?」「これおいしそうだよ」と話しながらすぐに箱の中に入れていた。KA君やAS君箱には入れず大事そうに自分のポケットにしまっていた。

12月7日

- ・目的 身近なものとのイメージの世界を繋げて楽しむ
- ・計画 探索散歩

朝「今日はどこにお散歩に行こうか?」と子ども達に聞くとYU君、AS君だけ「したのみちにオバケさがしにいきたい」と答え、後の子は別世界(散歩コースの1つ)と答える。「べっせかいやだ」「おぼけがいい」と最初は嫌がっていたが、「別世界にもお化けがいるかもしれないよ」と声をかけると急に興味が出てきたのか、「いくー」と行く気になっていた。別世界に付くと家一つ一つ覗きながら、「じゃらんぼんは?」「あれじゃらんぼんじゃない?」とYU君、AS君の二人でじゃらんぼんを探しながら散歩をしていた。

じゃらんぼん自体は年度の始めから「じいさまときつね」を読み聞かせてきて子ども達もなんとなく知っていたが、下の道の事務所の窓を保育士が「じゃらんぼんの家じゃない」と設定することで初めてじゃらんぼんが具体的な存在として子ども達の前に現れた。そしてじゃらんぼんとの交流が始まる。探索の中心にはいつもじゃらんぼんがいて、何気なく通り過ぎていた道端のどんぐりやカラスウリなどの自然もじゃらんぼんのイメージの中に組み込まれていき、共通のイメージとして子ども達の中で共有されていった。このように探索を通して新しいイメージが作られていった。

第4段階 物語と現実の交差によるクラス文化の創造

探索を通して様々なものをじゃらんぼんと結び付けてオリジナルのイメージを広げてきた。そのイメージを現実の世界と交差させクラスの文化を作っていった。

11月27日

- ・目的 クリスマスのイメージとじゃらんぼんのイメージを重ねて楽しんでいく
- ・計画 探索散歩とクリスマス制作
散歩の帰りに下の道によると、保育士が「あれ?何

だろう?キラキラ光ってるよ」と道の先を指さしながら話す。

「え?どこ?」と子ども達が探すが中々見つからない。そして近づくと金色のリボンが付いている、まつぼっくりを発見する。KO君、RAちゃん、YU君を先頭に次々と拾う。保育士が壁を指さし、「何か書いてある。じゃらんぼんが皆にクリスマスプレゼントを持ってきました、だって」と話すと、全員不思議そうな顔をしていた。

12月10日

じゃらんぼんからプレゼントしてもらったマツボックリでクリスマスツリーの制作をする。SAちゃん、TA君、RAちゃんなどは、「じゃらんぼんからもらったんだよね」とじゃらんぼんからもらったことを覚えていた。

1月19日

- ・目的 節分のイメージとじゃらんぼんのイメージを重ねて楽しんでいく
- ・計画 柊探しと、お豆作り

朝副園長が「保育園にこんな手紙が入ってたよ」と言って子ども達に手紙を見せる。MOちゃんが真っ先に「じゃらんぼんからじゃない!?!」と言うと全員が手紙に注目していた。手紙を読み、柊の葉っぱを子ども達に見せ、「今日はこの柊の葉っぱを探しに行こう」と声をかけると、「オー」「いいよ」と全員意欲を見せていた。見比べられるように柊の葉っぱを下の道にもっていき、「どこにあるかな?」と保育士が探し始めると、RAちゃん、SAちゃん、RIちゃんは「これかな?」「ちがうよチクチクしないじゃん」などと話しながら、生えている葉っぱや落ちていた葉っぱを見比べたり、触りながら真剣に探していた。YU君やAS君はこれかな?と思うはっぱを見つけると「これ?」と保育士に聞いていた。

中々見つからず、AS君が「きょうりゅうのたまごいきたい(散歩コースの一つ)」と言うので、「じゃあ恐竜のたまごまで探しに行こうか?」と声をかけ歩きだしたとき、TA君が「あれ、これだよ、ひいらぎ!」と生垣の柊を見つける。皆で柊を取りその後じゃらんぼんの家の前に「お手紙ありがとう」と柊を1枚おいてから帰る。

1月27日

じゃらんぼんから2通目の手紙と箱が届く。「またお手紙とプレゼントがきたよ」と言って子ども達に見せると「じゃらんぼんだー!」とRAちゃんが大声で叫ぶ。AS君とAKちゃんが「よみたい」と訴えていたが、「今日は先生が読むね」と言って手紙を読む。読んでから箱に入っていた豆(新聞紙を紙テープで丸めたもの)を子ども達に見せ、「このお豆じゃないと鬼をや

「つけれないんだって。今度皆でこのお豆を作ろうか？」と話すKO君が「KOはけんでたおすし」と言うので、「でもじゃらんぼんはお豆じゃないとだめだって書いてあったけど」と伝えると「エー」と少し不満を見せながらも納得していた。

クリスマスや節分はそれ自体オリジナルな文化ではない。しかしそこにじゃらんぼんが関わり、交わることでこの時の2歳児クラスオリジナルなものになる。クリスマスや節分でじゃらんぼんが登場するところは日本中でおそらくこの時の2歳児クラスだけだったと思う。そしてそのじゃらんぼんの存在を子ども達も当たり前前に受け入れ、常に自分たちのそばにいるものだと感じていた。

このように1年を通して段階ごとにごっこ遊びを發展させて楽しんでいくことで、この年の2歳児クラス独自の文化を作れたのではないかと思う。

〈ローカルな文化を作っていくことが大事だと思う理由〉

1年間、ローカルな文化を作るという目標を掲げて、じゃらんぼんと言う架空の存在を中心に子ども達とごっこ遊びを楽しんできた。最初は単に怖いだけの存在だったじゃらんぼんが交流を重ねていくうちに怖いだけの存在ではなく、少し怖いけど楽しい存在に変わっていき、子ども達の中で受け入れられていった。特にYU君AS君は当初怖がる姿が多かったが、探索散歩などでじゃらんぼんと交流していくうちに積極的にじゃらんぼんを探し、自ら関わっていきこうとするようにまでなった。

最初は受け入れられるか心配だったが、子ども達のノリの良さ、イメージする力に助けられ、ここまで定着することができたと思う。保育者は遊びやイメージをリードしたり、イメージに共感したり、ある時はじゃらんぼんになりきったりと色々な角度から子ども達と一緒に遊んできたが、子ども達とごっここの世界に入り込んで遊ぶ

のは保育者にとっても、とても楽しい時間だった。

まだ発達的に2歳児クラスの子達はごっこ現実の境界が未分化である。だからこそノリがいいとも言える。そのノリの良さを遊びにつなげ、想像の世界を大人も子どもも思いっきり楽しむ。そしてその楽しんだことの積み重ねが、文化の創造に繋がるのだなと感じることができた。

現代ではネットやテレビに子ども達が喜ぶようなコンテンツがたくさんある。子ども達はそのコンテンツに出てくる、キャラクターなどにあこがれなりきって遊んでいる姿もある。その姿自体を否定するつもりはないが、そのようなコンテンツに出てくるキャラクターは子どものハートを掴み、感情移入させるためにとてもよく作り込まれている。しかしよく作り込まれているがために、そこにはイメージを広げる余地はない。またその特定のコンテンツを見ている子どもと見ていない子どもではイメージを共有して一緒に遊んでいくことができない。これはせっかくイメージを広げて遊ぶ楽しさが芽生えてきた子ども達に対して、そのイメージを広げる機会を、遊びの發展の機会を奪ってしまうことになるのではないかと考える。

皆で共有できるイメージやストーリーをごっこ遊びなどを通して表現し、發展させることで文化はできていくと思う。これは今の2歳児クラスでしか通じない、ローカルな文化だが、このローカルな文化こそを大事にしていくことが、子ども達のイメージを広げる力を保証することに繋がるのではないだろうか。

参考文献

ごっこ遊び 河崎 道夫 ひとなる書房
子どもとつくる2歳児保育 ひとなる書房
保育のきほん2、3歳 ちいさいなかま社

講評：2歳児クラスにおけるごっこ遊びの実践

評者：小林 芳文

本研究の動機として、これまでの2歳児保育での活動に加え、新たに2歳児の情動発達をねらいとした保育に向け、ごっこ遊びの導入の試みをされたことに、興味をもって拝読しました。しかし、その研究の進め方・方法が、十分に伝わってこないことが残念でした。研究の手法をきちんと入れると良い実践報告になったと思います。

保育に、第1段階から第4段階へのステップを考えたことで、ごっこ遊びでの情動の試みに深さが見られたことは、面白いと評価しました。実践研究のまとめとして、「ローカルな文化を作っていくことが大事な理由」の箇所を、この研究の「まとめ」や「考察」として記述することがあれば評価点が高くなったのではないかと感じました。また、タイトルをつけるためにも内容との接合を考えることをお勧めします。

評者：天野 珠路

2歳児の特性や発達を踏まえた2歳児保育の記録であり、保育の情景や子どもの姿がしっかりと記されています。イメージを膨らませながら「つもり・見立て・まね」が楽しく繰り返される2歳児の認識力、想像力が具体的な姿として描かれ、子どもの魅力が伝わります。2歳児の保育に悩んだり、苦勞したりしている保育者に読んでいただきたい作品です。

文中、「ローカルな文化」という言葉が何度も出てきますが、その意味合いや捉え方がやや曖昧で漠然としているように感じます。保育は確かに文化の創造につながるものですが、早急に定義づけたりせず、子どもの成長・発達の面白さを味わいながら保育の多様な側面やその奥深さをより探

究していただきたいと願います。

評者：田和 由里子

2歳児という発達段階を考慮して「模倣…まねっこ」「特定なお話のイメージの共有」「自分たちの身のまわりにあるものから取り入れての探索活動」へと発展させています。実践を詳しく記載しているので情景が浮かびやすかったです。できれば、子どもたちの様子が写真などで説明があればよりわかりやすかったと思います。「研究レポートの書き方」を参考にまとめるとより素晴らしい実践報告となっていたと思います。2歳児としてこの実践を通してどのようなことが育ったかがまとめにあると良かったと思います。

色水遊びを通して

滋賀県・幼保連携型認定さくらがおかこども園 尾関 邦子・大内 明美

1 色水遊びのきっかけ

昨年度の3月、子ども達と植えたパンジー、金盞花、マリーゴールド等、色とりどりの草花が咲き出して園庭はとっても華やかです。5月の連休後、園庭に出た子ども達は「きれいに咲いている」「色んな色の花がある！」と話しながら水やりをしている。

落ちていたパンジーの青色を拾ったA児が指でつぶして「あっ青い色がついた」と友達に指を見せる。「ほんとやおれもやってみよう」と落ちていた花を拾って「ほんまやほんまや」と友達と指を見せ合っていた。そこへやって来た保育者に「先生、この花つぶしたら色つくねんで」「私もついたついた」とそばにいた子ども達が話しかけてきた。保育者は、これはチャンスとばかり、そこにいた子ども達に「咲き終わったパンジーで色水を作ってみない？」と誘いかけたところ、「するする」と賛成するなり、落ちていたパンジーの花を集めかけている。青、紫、エンジ、黄色、白、他まだらのパンジー等咲き終わりがけの花も集めて、色水遊びにとりかかる。

2 色水遊びを通して

自然物を使った色水遊びは、すりつぶす、水の量によって濃さが違う、茶こし器、ガーゼの布でこす、入れ物を工夫する、つぶす道具（木の棒、石、手等）を考える、ジュースやさんやままごとにする等の活動が予想される。子ども達はどんな花や草が色水が出るか、また、様々な道具や物に出合い、よりきれいな色水を、より濃い色水を出そうと何度も繰り返して遊ぶことができる。こうした環境に自ら出合い、体験を重ねながら自ら気づきながら知識と技術を生かし何度も繰り返して遊ぶことができる。

3 色水遊びの実際（4歳児、5歳児）【 】は遊びこんでいる姿を分析する

(1) 4歳児

- ・保育者の摘み取った花を見て「先生頂戴」「私も、僕も」ともらった青色のパンジーを指先でつぶして「あっ指が青くなった」「ほんまや僕もや」「私も」と見ている。【興味・関心・気づき】
- ・保育者は「ほんとや青くなったね。この花で色水を作ってみたらどう？」と誘いかける。「しようしよう。先生もっと花ちょうだい。」「【意欲】
- ・先生に摘んでもらったパンジーを側にあった椅子の上

に置いたA児。「水がいるね。入れ物もいるし、みんなもっと入れ物探して」【意欲】

- ・B児は「ジップロックがいいな。先生ちょうだい」と2枚もらったジップロックに水を入れて、その中に青いパンジーを入れる。「もみもみしよう」【挑戦】
- ・指先でもみもみつぶしている。「少ししか青くならないよ。」「ほんとや、花が少ないのかな?」【気づき】
- ・「先生、もっと頂戴」と言い、いっぱい入れてもみもみしている。「やっぱりうすいわ」【発見】
- ・隣にいたB児。「水が多すぎるのと違う?ここへ少し水捨てたら?」【発見】
- ・側にあったコップに少し水を捨てる。「あっもったいない。これもちょっと青くなっているし」【感動】
- ・「又、次にその水使えばいいじゃん」「うん」「青色ジュースの出来上がり」と皆に見せている。「ほんときれいな青色ジュースやね」「このペットボトルにいれたら?」「きれいな青色になった!」【発見】
- ・「青色ジュース青色ジュース」と大喜び。【歓声】
- ・「僕は赤いパンジーですわ」と赤いパンジーをつぶしだした。【意欲】
- ・「わー。きれいな赤色が出てきたイチゴジュースみたい」【発見】
- ・「ほんとだ。赤いパンジーもきれいだね」【集中力】
- ・「イチゴジュース。イチゴジュースの出来上がり」「わあ、きれいきれい。」「ペットボトルに入れよう。でもちょっと少ないし、もう少し花をもらってしようよ」【意欲】
- ・「そうだね」とさらに続けてもみもみしている。【集中】
- ・そばに作っていたC児。作りかけの青色水を置いて「ちよっとまってね。」と席を離れる。しばらくして手にサクランボの少し赤い実を持って来て自分の作っていた色水をコップに移して、その中にサクランボの実を入れて「わあー氷が浮いているみたい。」「【発見】
- ・「きれいやね。」「飲んでみよう」「ごくごく」「ああおいしい」と。すると、側にいたA児も「私にも頂戴」とコップに少し入れてもらって、その中に木の枝を入れて「これストローだよ。飲みやすい」【試み】
- ・「おいしいね」と話し合いながら、嬉しそうに遊びに没頭していた。

(2) 5歳児

- ・隣の椅子では5歳児が色水遊びを始めている。たくさ

んの花を先生からもらい青色、赤色、黄色、紫色等の花を入れ物に分類して入れている。色水遊びにとりかかる前にいろんな道具を集めてきた。【意欲】

- コップ、皿、ペットボトル、少し大きめのカップ等。ペットボトルに水をくんで、そこからカップに水を少しずつ移して、初めは手でもみもみしていたが、【集中力】
- なかなか色水が出来ないので、辺りを見回し、棒を拾ってきて棒の先でつぶし始めた。【発見】
- 「わぁーきれいな青色がでてきた。けど、少し水色やわ。もっと濃い青色にしよう。」【意欲】
- 「花を多く入れて！そうや、水が多いとあかんしね」と独り言をいながらせつせと色水作りを始める。【挑戦・集中力】
- 「もっと太い棒ないかな？」と探しに行ったC児。【意欲・気づき】
- 「土手に上がって見てくるわ」と土手に切り捨てている木の枝を2本拾ってきて【工夫】
- 「B君、これをつぶしたらいいで」と隣の子に一本渡し、自分は少し太めの木の棒で赤色の花をつぶし始め、【挑戦】
- 「わぁ、こんなきれいな赤い色、イチゴジュースだ。イチゴジュースの出来上がり！」と大喜び。【発見・集中力・満足感】
- 「もっと、たくさんしないと足らんし」と水を入れてジュース作りに真剣。「あーっ、出てきた出てきた。イチゴジュースや」とペットボトルに入れる。じっと見ている側にいたD児。「ちょっとへん？」【発見】
- 「何が？」「だって、ジュースの中にもろもろが浮いている」【試行錯誤】
- 「そうや、ジュースの中にもろもろなんてないや」「あっそうか。ジュースにはもろもろないや」【発見】
- 「これ、とらなあかんね。」「いったん、カップに戻して手で取ろうか」【工夫・意欲】
- 「うんそうしよう」とペットボトルに入れたジュースをカップに移し、手で取りだしている。【工夫】
- 「まだ残っているね」「どうしたら、なくなるのかな？先生に聞こう」【試行錯誤・挑戦】
- 「そうや、先生に聞いてこう」【疑問】
- B児の二人は階段を上って先生を呼んでくる。「先生、このもろもろどうしたら取れる？」【意見】
- 「手ですくうんだけど、小さいのが残るんや」保育者は「分かった。ちょっと、お部屋でとってくるね。」と階段を駆け上がり、部屋から茶こし器とガーゼを持って来て、子どもに渡す。【教師の指導】
- 「あっこれ、お茶いれる時使うわ。お母さんもこれでお茶こしていたで。」「あっ、私も知っている」【知識】
- 「これで色水こそう。」と茶こし器をカップの上にして色水をこす。【挑戦】
- 「わー。きれいなジュースになった。」【発見】

- 「こんなつぶつぶが残っている。」「これは捨てていい？」「いいよ。」ときれいなジュースをペットボトルに入れている。保育者が「この布（ガーゼ）も使ってもいいよ。」と教える【指導】
- 「私、使うわ」と茶碗の上にガーゼを広げて、もろもろの入った色水をじゃーと入れる。【挑戦・集中力・工夫】
- 「あっきれが沈んだ。これあかんわ」【発見】
- 「私が端持つから、こっち誰か持って」【発見・挑戦】
- 「分かった。一緒にやろう。」と、二人にもってもらって、ペットボトルに入っているもろもろの青色の色水をこしている。【協力】
- 「はなさないで、そのままきれは横に置いて…」「わぁ、もろもろ何にもなくなった。きれいな青色やな。」とびっくりしている。【感動】
- きれいなイチゴジュースと青色ジュースが一本ずつできた。「もっとせんと、ジュース屋さんできひんな」「そーや。みんなにいうて、みんなでしょう。」【意欲】
- 「僕、みんなにいつてくるわ。」「私もさそってくる。」と部屋にいる友達を呼びに行く。【協力】
- 他の子ども達はパンジーの花だけでなく、金盞花の花も色水作りをし始めた。「わー。きれいきれい。オレンジ色や。オレンジジュースの出来上がり！」と周りにはいる子も一緒に歓声をあげている。【歓声】

4 まとめ

- 4歳児は偶然見つけた花の色が出ることに驚き興味を示していた。色を種類で分けるのではなく色とりどりの花を水に浮かべそれを陽にかざして眺めたり薄く色づいた水に満足げな子ども達だった。
- 活動時間の後も5歳児のみが園庭で色水遊びに熱中していた。たくさんできたペットボトルのジュースは部屋に持ち帰って、ジュース屋さんに発展するのだろう。春の日差しをあびて、色水遊びに熱中したひと時だった。このように夢中になっている遊びに没頭している時、遊びこんでいる時に学びの芽生えは獲得されていると思う。
- 色水遊びの中で「興味」「歓心」「気づき」「発見」「意欲」「試み」「挑戦」「集中力」「満足感」「感動」「工夫」「意欲」等の活動を分析した事によって①言葉のやり取り②協調性③数量の感覚④表現の方法⑤人間関係などについて話の中にある学びがしっかりととらえることができた。
- 色水遊びはこれで終わるのではなく、まだまだ、色水の出る植物に子ども達はいっぱい出会うと思う。次には、夏の花や草、秋になれば草や木の実など。また、いつ遊ぶのかどんな材料や道具を準備するのか、どれ位必要なのか、それはどこにあるのかなど、子どもなりに考えなければならぬことがいっぱいである。
- 遊びが思考を深め、学びの芽生えを形成することにな

ると考える。環境、遊び、そして生活を通して行う保育はとても大切である。自らの好奇心を満たし、意欲をもって、遊びに没頭している姿こそ学びに通じるの

ではなかろうか。この後、色々な材料や環境が山積する中で新たな発見の喜びに共感し活動を広げていきたいと思う。

＼色水やさんでーす！／



「オレンジジュースみたいな色だね！」
「おいしそう!!」
「この花は色がでない…」
「水が多すぎたかな…??」
「もっとやりたーい！ お花ちょうだい」

さくらんぼの実をいれて…
「こおりがういてるみたい～」
「ゴクゴク おいしいね～」
「 // あまい!!」
木の枝をいれて…
「ストローにしよう！」



「モミモミ 水色がでてきたよ」
「もんでみたら きれいになった！」

講評：色水遊びを通して

評者：小林 芳文

この研究で取り上げた色水遊びのきっかけは、拾った花を指でつぶして生まれた色付きの面白さでした。子ども達の自然な遊び感覚から生まれた研究テーマ、そこに保育者の導きがあり、色々な保育の試み、花のすりつぶしや水の量による濃さの違い、入れ物の工夫等様々な道具や物に出会い、体験を重ね、子ども達が面白さにのめりこんでいく姿に惹かれた実践研究でした。保育教育における大事にしたい「遊びと学び」の原点に触れる、大変興味のある研究と受け止めました。4歳児と5歳児の遊んでいる姿が生き生きと触れられており、そこにそれぞれの発達の知見や奥の深い自然な教育が述べられ評者を引き付けてくれました。幼児に体験したい遊びの中での学び、その芽生えになる研究でした。

各年齢での取り組み実践にエピソードも添えた「学びの視点」があります。研究手順に沿ってまとめられたらもっと良いものになるのではないかと思います。また、研究のタイトルは、先生が挙げたキーワードが少ないため、研究内容がどういふものなのかが伝わって来ません。今後の参考としてください。

評者：高木 早智子

4・5歳児の色水遊びをテーマにかかれた実践研究で、子どもたちの言葉を丁寧に聞き取り、記録をしている点が評価できると思います。添付の資料もドキュメンテーションのようで、子どもたちの遊びを存分に楽しむ姿が見られました。惜しいと感じたのは、まず問題提起と目的に触れていない点です。この「色水遊びを通して」どういふ点を検証したかったのかが、はっきりと述べ

られていなかったように思います。報告書内では「遊びこんでいる姿を分析する」ことも行われていましたが、ここまで丁寧に子どもたちの言葉を拾い上げ、その内容について分析しているのですから、幼保連携型認定こども園教育・保育要領にもある「10の姿」に結び付けて分析をすることで、子どもたちの学びの姿がより明確になり、保育実践研究としての内容が深まると思います。次回はそのような視点にも留意され、保育実践研究をされてみてはいかがでしょうか。

評者：馬場 耕一郎

色水遊びを通して興味・歓心・気づき・発見・意欲・試み・挑戦・挑戦・集中力・満足感・感動・工夫・意欲等の活動の分析から子ども達の言葉のやり取り・協調性・数量・表現・人間関係と関連された研究です。研究から遊びが思考を深めることに気付かれた点は素晴らしいと思います。また、遊びが学びの芽生えを形成すると考えられたことは今後も保育の質の向上に繋がると思います。是非、継続した取り組みを期待しています。

第16回 保育実践研究 報告集

令和4年3月31日発行

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麴町1-6-2 6階

TEL 03-3222-2111 (代)

FAX 03-3222-2117

